大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

疎開する太宰治：疎開者小説の可能性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山﨑, 正純 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002601

疎開する太宰治 ― 疎開者小説の可能性

山　﨑　　正　純

言語文化学研究（日本語日本文学編）
2009・3　第 4 号抜刷
大阪府立大学人間社会学部　言語文化学科

疎開する太宰治――疎開者小説の可能性

山崎正純

一　疎開者小説の問いかけるもの

『お伽草紙』（一九四五年一〇月 筑摩書房）の「カチカチ山」の冒頭は「カチカチ山の物語に於ける兎は少女、さうしてあの惨めな敗北を喫する狸は、その兎の少女を恋してゐる醜男。これはもう疑ひを容れぬ厳然たる事実のやうに私には思はれる。」で始まるのであるが、このように断定して見せる語り手の、その断定の根拠は、必ずしも作品中で明らかにされているわけではない。たとえば語り手は「しかも、この狸たるや、アルテミス型の少女に惚れる男のごたぶんにもれず、狸仲間でも風采あがらず、ただ団々として、愚鈍大食の野暮天であつたといふに於いては、その悲惨のなり行きは推するに余りがある。」と狸の悲惨な運命を繰り返し語っているのだが、こうした語りを幾度繰り返しても、兎と狸の両者の甚だしい懸隔が、どこからやってきたものであるのか、その懸隔の甚だしさについて「これはもう疑ひを容れぬ厳然たる事実」と断言しておかなければならない理由は、やはり明らかではない。

『お伽草紙』執筆のころ、すなわち一九四五年三月から六月末に至る時期、太宰は空襲による家屋焼失と疎開による移動・避難生活を繰り返している。諸種の資料によって明らかにされている通り、「前書き」「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の順に書き継がれていく時間の経緯は、東京大空襲、妻子の甲府への疎開、三鷹に空襲、甲府・石原家へ疎開、甲府市街一円に焼夷弾投下、石原家全焼し知人を頼り避難生活、とめまぐるしく移動していく軌跡と重なっている。そこには家屋・家財の焼失にともなう疎開生活への転落という構図、言い換えれば、所有する者からせざる者への転落の構図を見出すことができるだろう。六月末に『お伽草紙』を完成し、七月に原稿を

小山清に託した後、七月末、甲府から上野駅、そこから四昼夜をかけて金木の生家に妻子とともにたどりつく。

「カチカチ山」の兎は「アルテミス型の少女」とされ、「アルテミスは月の女神で、額には青白い三日月が輝き」、「小柄で、ほつそりとして、手足も華奢で可愛く、ぞつとするほどあやしく美しい顔をしてゐる」と評される。そのような兎の月光のような透明な白色の美しさは、「おれはこの色黒のため生れて三十何年間、どのやうに味気ない思ひをして来たかわからない。」と言い、「色白にさへなつたら死んだつてかまはんのだ」と口走る狸の醜悪魯鈍の姿との甚だしい懸隔において、一層際立つ美しさとその残酷さとを露わにすることになる。

〈疎開者〉であること。太宰治が実際に〈疎開者〉として書きかけの原稿を抱えながら生活の場を求めて移動した経験は、〈疎開者〉という人間の様態の一つを通じて、人間が社会生活を営もうとする限り踏み外すことの許されないものが何であるかを痛切に知らしめることになったものと考えられる。そしてその痛切な認識が、「カチカチ山」の兎と狸との間に、いわば絶対の懸隔を差し挟むという着想を太宰に与えることになった。「カチカチ山」は、疎開の途上ないしは疎開先での生活に取材したと思われるかなりの数に上る作品の、いわば祖形の位置にあるといえるようだ。

「たづねびと」（『東北文学』一九四六年一二月）は「ボロ服の乞食姿で、子供を二人も連れてゐる色魔」と自分を表現するほかない〈疎開者〉の語り手自身が、「うまくいつても三昼夜はたつぷりかかる旅程」の途上、食料に窮し、頼る人もない疎開行の列車の中で、「ええ、もう、この下の子は、餓死にきまつた、自分も三十七まで生きて来たばかりに、いろいろの苦労をなめるわい」と開き直ったその時、「白い半袖のシヤツ」を着た「若い女のひと」に過分な食料を与えられ救われた経験が語られている。

「失礼します。お嬢ちゃん、さやうなら。」

女のひとは、さう言つて私のところの窓からさつさと降りてゆきました。

私も妻も、一言も何もお礼を言ふひまが、なかつたのです。そのひとに、その女のひとに、私は逢ひたいのです。としの頃は、はたち前後。その時の服装は、白い半袖のシヤツに、久留米絣のモンペをつけてゐました。

逢つて、私は言ひたいのです。一種のにくしみを含めて言ひたいのです。

「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食は、私です。」と。

「白いズツクの鞄」の中から次々と食料を取り出し、「私」の膝の上に積み重ねていく「白い半袖のシャツ」の「はたち前後」の「若い女のひと」。だが「私」はこの女性のこのときの振る舞いに「一種のにくしみ」を抱くというのだ。そうして「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食は、私です。」とその女性に言いたいというのである。

ここには〈疎開者〉が「乞食」であること、すなわち社会的な経済行為の主体として失格者であることを、厳然たる事実として突き付けられた〈疎開者〉の悲しみが、宛先のない言葉となって流れ出している。「たづねびと」というタイトルには、絶対の懸隔を目の前に、なお言葉をもって主体性の奪回にあえて奮い立とうとする語り手の意地が感じられる。だが「私」の言葉は、「女のひと」が帯びる絶対的な〈良さ〉に対する愚かな僻み、「女のひと」への忘恩的愚行とどこが違うのだろうか。「東北文学」という文学雑誌の誌面に書き連ねられた「私」の言葉は、言えば言うほど自身の愚かさと「女のひと」の〈良さ〉との懸隔を露呈し、天に向かって唾する愚行となるほかないのだ。

絶対的な〈正しさ〉と向き合うということは、〈疎開者〉にとって命を救われることである。その〈正しさ〉をあえて拒絶しようとする〈疎開者〉は、疎開せず空襲のただなかに残ることをむしろ選ぶのがよい。生きたいか？という問いの前で〈疎開者〉はいわば畜犬のように卑屈になるほかないのである。

だがそのようなことを「一種のにくしみ」という言葉にたくすことは、やはり愚かなことではないか。「たづねびと」一篇には、絶対的な〈正しさ〉や〈良さ〉が暴力となってしまう状況が、自己弁明の不可能性という無間奈落の世界として描き出されている。あらゆる言葉が自分自身を裏切っていく。私の発する言葉の一つ一つが、私の言葉を封殺する。

「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食は、私です。」という言葉は、疎開者小説の本質をよく表している。とりわけ食料尽きて疲労の極にある〈疎開者〉にとって、経済社会のネットワークに経済行為の主体として参画し、この窮状を打開することなど不可能なのである。この不可能性がすなわち餓死へとつながる道であることは明らかだ。行き倒れていく〈疎開者〉は、経済行為の主体として失格したことによって、人間としての生存をも手放さざるを得ない。すなわち〈疎開者〉とは人間としての主体性の質を、経済行為の担い手たりうるか

の一点によって決定されてしまう存在なのだ。疎開者小説という文学ジャンルは、社会と人間との抜き差し難い関係の実態を、生きるための経済行為にまで純化させ、抽象化させることで、この社会の外に出る行為がいかに反社会的行為であるか、一個の生命の維持をすら不可能にする愚行であるかを端的に示してみせる。

〈疎開者〉はしたがって救いの訪れを常に待っている。そして同時に、その救いの残忍さを恐れてもいるのだ。こうして「カチカチ山」の「狸の死ぬるいまはの際の一言にだけ留意して置いたら、いいのではあるまいか。」という結びの段にいたるのである。「惚れたが悪いか。」といいながら狸は「はじめて兎の悪計を見抜いた」という。だが時は「既におそかつた」。

兎の絶対的な美しさに焦がれつつ、しかし何一つ報われることのなかった狸は、泥船によってこの世から抹殺されることになる。泳げない狸が最期に発した言葉には、絶対的な美しさに焦がれて生きてきた人生の肯定と、遂に越えることのできなかった絶対的な懸隔の重大な意味、すなわち希望と絶望とがともにその懸隔の大きさから生まれてくるという厳然たる事実が刻まれているといえるだろう。この狸の認識は〈疎開者〉と絶対的な〈正しさ〉との関係において、現実に生きる人間の体験としてまさに現前してくるのである。狸は死ぬが、〈疎開者〉は生き延びなければならない。だが〈疎開者〉が確実に生き延びる保証がない以上、〈疎開者〉と狸との間には懸隔がない。両者は存在論的に同一なのだ。希望と絶望が常に同じ状況の中に出現する。惚れることと、主体性の抹殺とは同時なのだから。だが「たづねびと」の「私」は、「カチカチ山」の狸のように容易に死ぬわけにはいかない。「私」は父なのである。「女のひと」の絶対的な〈良さ〉〈正しさ〉に、無駄と知りつつ抗議しなければならないのは、このためなのである。この「一種のにくしみ」の吐露がどれほど愚かな冒涜の言葉に聞こえようとも、父はこの言葉によって自らを深く傷つけることで父として生き延びていくほかないであろう。

疎開者小説は、このようにして父の倫理性の問題へと読者を呼び寄せるものでもあるのだ。

二　〈正しさ〉とは何か

「親といふ二字」（『新風』一九四六年一月）は、「二度も罹災して、たうとう津軽の兄の家へ逃げ込んで居候といふ身分になつた」「私」の疎開生活の一齣を描くという設定の作品である。「私」は疎開中、戦災で末娘を失ったという一人の「爺さん」

と郵便局で知り合う。この「爺さん」は文字が書けない。預金の「払戻し用紙」には、小説家の「私」が代筆する。預金の名義は「竹内トキ」。「実にしばしばその爺さんと郵便局で顔を合せ」る「私」は、「爺さん」の「二十六になる末娘」「竹内トキさん」が、空襲で家を焼かれ、彼女自身も大やけどをして、「象さんが来た、象さんが来た、とうはごとを言つて、息を引きとつた」ことなどを知る。

「爺さん」はその末娘と青森市内の家で同居していたのだが、戦災で家を失い、その際の空襲で末娘も死亡して、単身青森から「北津軽郡金木村」に移ってきた〈疎開者〉である。「私」もまたこの金木の「兄の家」に転がり込んできた〈疎開者〉であり、小説家の「私」はこの「おどおどして、さうして、どこかずるさうな、顔もからだもひどく小さい爺さん」と奇妙な連帯意識を持つようになる。「大酒飲みに違ひない、と私は同類の敏感で、ひとめ見て断じた」と。

「旦那。」と呼び、さうして、「書いてくれや。」と言ふ。
「いくら?」
「四拾円。」
いつも、きまつてゐた。

さうして、その間に、ちよいちよいかれから話を聞いた。それに依ると、かれは、案にたがはず酒飲みであつた。四拾円も、その日のうちにかれの酒代になるらしい。この辺にはまだ、闇の酒があちこちにあるのである。

「爺さん」のこの行為は、倫理に反するであろうか。「私」はしかし娘の預金から「四拾円」ずつ引き出しては酒代にするこの「爺さん」に、「みんな飲んでしまひなさい、と私はよつぽどかれに言つてやらうかと思つた。」と書く。

「十五年間」(『文化展望』一九四六年四月)の語り手「私」もまた「れいの戦災をかうむり、自分ひとりなら、またべつだが、五歳と二歳の子供をかかへてゐるので窮し、たうとう津軽の生家にもぐり込んで、親子四人、居候といふ身分になつた」と書いて〈疎開者〉としての自分を確認することから語り始めている。その「私」が「私の半生は、ヤケ酒の歴史である。」と断定した上で次のように語る。

秩序ある生活と、アルコールやニコチンを抜いた清潔なからだを純白のシーツに横たへる事とを、いつも念願にしてゐながら、私は薄汚い泥酔者として場末の露路をうろつ

きまはつてゐたのである。なぜ、そのやうな結果になつてしまふのだらう。それを今ここで、二言か三言で説明し去るのも、あんまりいい気なもののやうに思はれる。それは私たちの年代の日本の知識人全部の問題かも知れない。私のこれまでの作品ことごとくを挙げて答へてもなほ足りずとする大きな問題かも知れない。

この文章のあとに、「私はサロン芸術を否定した。サロン思想を嫌悪した。要するに私は、サロンなるものに居たたまらなかつたのである。」という一文が続くことから明らかなように、ここで「私」は「サロン思想」「サロン芸術」を公然と否定する思想や芸術をもたないのである。公然と否定することが不可能であるような「思想」「芸術」として「サロン」は存在しているからである。

「十五年間」の「私」は「サロン」を称して「知識の淫売店」「戦時日本の新聞」「知識の『大本営発表』」とあらゆる言葉を総動員して非難するが、そのどれよりも「サロン」は「まだ悪い」。要するに「サロン」は絶対的な〈正しさ〉や〈良さ〉の価値の中心であり、それを否定するものは、その自ら発した言葉によって否定し去られることになるのである。

「サロン」とはいわば必然的推論の前提であり、あらゆる推論はこの前提から流れ出す。「サロン」を否定する論理は、それは単に論理的な誤りに過ぎないのだ。正しい推論は、必ずこの前提を支持する結論に到達する。それが必然的推論というものなのである。

「私」が「薄汚い泥酔者として場末の露路をうろつきまはつてゐた」のは、直接的には「サロン」と距離をとり、それへの抵抗の姿勢を示そうとしたからである。だが「薄汚い泥酔者」でしかないその姿勢のどこに、「サロン」を越えうる思想があるだろうか。「私」は「私」の半生を振り返り、そこに常に立ち塞がるように存在した問題についてこのように考え、その困難を「日本の知識人全部の問題かも知れない」というのである。

私はサロンの偽善と戦つて来たと、せめてそれだけは言はせてくれ。さうして私は、いつまでも薄汚いのんだくれだ。本棚に私の著書を並べてゐるサロンは、どこにも無い。

この主張自体、「サロン」に認められない悔しさと僻みに過ぎぬものと読めば読めてしまうだろう。「私」はむろんそれをも承知の上で語っているのではあるのだが、絶対的な〈正しさ〉〈良

さ〉の中心にある「サロン」が強要してくるもの、すなわち「サロン」は「サロン」であるという強烈な同語反復、あるいは誤りようのない必然的推論の磁場に捉えられた者には、「泥酔者」でしかない「私」の言葉は、「サロン」へのひねこびた劣等感でこそあれ、「日本の知識人全部の問題」を提言する挑発的発言ではあり得ないのだ。

さて、「竹内トキさん」の父親は、この戦災死した末娘の預金を酒代に使う父親である。娘を戦災によって失った父親がその悲しみをどのように鎮めるか。「私」が思わず「みんな飲んでしまひなさい」と声をかけようとしたのは、こうして娘の大切な預金を酒代に費やし浪費していくことだけが、「爺さん」の悲しみの絶対値をすり減らしうる方法だと「私」は気づいていたからである。「サロン」向きの鎮魂歌はこの「無筆の親」の悲しみに届くことがないだろう。「爺さん」は娘の預金通帳から引き出した「四拾円」によって、自らの悲しみの絶対値の大きさに気づくのだ。飲めば飲むほど、悲しみの深さに「爺さん」は沈んでいくのだ。それはもはや癒しでも、鎮魂でもない。ただ悲しむことの繰り返しがあるだけである。

やがて「爺さん」は末娘の死亡保険金を手にし、「娘の名儀でこんにち入金のつもりでごいす。」と「私」に告げる。「私」もまた、この日「私の貯金のほとんど全部」を「ウヰスキイ」「十本ばかり」に投ずるために郵便局に来ていたのである。

「それは結構でした。けふは、僕のはうが、うけ出しなんです。」

甚だ妙な成り行きであつた。やがて二人の用事はすんだが、私が現金支払ひの窓口で手渡された札束は、何の事は無い、たつたいま爺さんの入金した札束そのものであつたので、なんだかひどく爺さんにすまないやうな気がした。

さうしてそれを或る人に手渡す時にも、竹内トキさんの保険金でウヰスキイを買ふやうな、へんな錯覚を私は感じた。

こうして「爺さん」の悲しみが「私」に手渡される。「私」は彼女の死亡保険金を酒代に投じ、「爺さん」の悲しみを背負う錯覚に捉えられる。だがこの錯覚は、作品末尾に描かれる「女房」と「這ひ寄る二歳の子」の姿によって、「私」の生きる現実の悲しみに変容する。「竹内トキさん」の死亡保険金と錯覚されたものは「私の貯金のほとんど全部」をうけ出したものにほかならず、この浪費によって「私」は「女房」と「這ひ寄る二歳の子」の生活の糧に直面せざるを得なくなる。すなわち「私」は作中

ここで初めて父の立場にはっきりと据え置かれることになるのだ。

だが「私」にとって父の倫理とは何であろう。「爺さん」もまた父の一人であったが、「私」が「爺さん」から手渡された父の悲しみは、娘の死を冒涜する背徳的な偽善とは無縁のものだ。「私」が「爺さん」の悲しみを語るのは、「爺さん」を背徳無頼の徒とみる「サロン」の思想から守るためであったともいえるだろう。しかし作品末尾の次の一節には、「私」の小説家としての意気込みが、父の倫理を語る〈正しい〉言説によって崩壊していく様を読み取ることができる。

数日後、ウヰスキイは私の部屋の押入れに運び込まれ、私は女房に向つて、

「このウヰスキイにはね、二十六歳の処女のいのちが溶け込んでゐるんだよ。これを飲むと、僕の小説にもめつきり艶つぽさが出て来るといふ事になるかも知れない。」

と言ひ、そもそも郵便局で無筆のあはれな爺さんに逢つた事のはじめから、こまかに語り起すと、女房は半分も聞かぬうちに、

「ウソ、ウソ。お父さんは、また、てれ隠しの作り話をおつしやつてる。ねえ、坊や。」

と言つて、這ひ寄る二歳の子を膝へ抱き上げた。

父の倫理についての〈正しさ〉は、このようにして娘を失った「爺さん」の悲しみの在り処を、「作り話」として倫理の問題の埒外に排除してしまう。「爺さん」と「私」が共有した悲しみの在り処は、その悲しみと正対し、よりその悲しみの奥に沈み、深い負い目を避けることなく背負い続けることによって、ようやく開けてくる世界であった。倫理とは、すなわち倫理的煩悶のことにほかならず、倫理的煩悶のないところに、父としての倫理などないのであった。

だがこうした悲しみの形、倫理を生きる生き方は、やはり現実に要求される父の〈正しい〉倫理的姿勢に比較したとき、絶望的に無力なのである。疎開生活が父に求める倫理性が、すぐれて経済的なものであることは明らかだ。生活の糧の問題を解決することを措いては、父は父たる資格を失うであろう。疎開者小説は、倫理の問題を経済行為の主体に限定する現実の力学を鮮明に浮き彫りにし、問題処理と紛争回避の能力の中に父の倫理を解消してしまう〈正しさ〉の奇妙さを描き出す。

紛争解決能力は手続き的理性による論理展開の能力により近く、倫理とは本来次元を異にするものであるにちがいない。む

ろん経済行為の主体として経済社会に参画することは、〈疎開者〉にとってぎりぎりのライフラインを維持するために必須の問題解決能力である。したがって倫理的煩悶に深く沈み込み、問題解決の糸口を見出すことができないとき、倫理的煩悶は人間の心身を崩壊させるであろう。そのとき人間は、あえて倫理的煩悶を切り捨て、経済的主体として現実社会に逃避するしかないのではないか。すなわち、倫理的煩悶を背負い続ける心優しい人間の共同体という理想郷は、結局経済社会のオートマティズムの流れに押し流され、エゴイズムの肯定という戦後的大義の前に、消えていくことになるのではないか。次に節を改めて、この問題について考えてみたい。

三　倫理と経済

「冬の花火」（『展望』一九四六年六月）に登場する二人の女性、「数枝」とその継母「あさ」は、それぞれ倫理的な煩悶を抱えて生きている。「数枝」は東京での結婚生活とその破綻に関する煩悶を半ば公然と抱えており、疎開先の生家で、父「伝兵衛」の〈正しさ〉の前に、ただこのように抗弁する他言葉を持たない。

（数枝）　（顔を挙げて）お父さん、あなたは、あたしが東京でどんな苦労をして来たか、知つてゐますか。

一方、「あさ」の抱える倫理的煩悶は、夫の「伝兵衛」、娘の「数枝」をはじめとして誰ひとり知る者はいない。それは村の男「金谷清蔵」との間に起こった六年前の秘密である。「あさ」が「数枝」にはじめてその事実を告げる場面は、「あさ」が「数枝」と同様の体験を正直に「数枝」に打ち明けることで、六年間抱き続けた煩悶から解き放たれるというカタストロフには決して至ることがない。

（あさ）　ちがひます。あたしは、お前よりずつとずつと悪い女です。あたしは、あの晩、あのひとを殺さうとしたのは、お前のためではなかつたのです。あたしのためです。数枝、あたしをこのまま死なせておくれ。死ぬのが一ばん仕合せなのです。数枝、あのひとは、六年前、ちやうどあのやうにして、このあたしを、……。

（数枝）　（顔を挙げ、蒼ざめる）

（あさ）　あたしは、馬鹿で、だまされました。女は、女は、どうしてこんなに、……。（泣く）

「数枝」は継母「あさ」の愛情を幼いころから全身に注がれ、「あさ」の心根の美しさを疑ったことはなかった。「優しすぎるわ、よすぎるわ。」「だからあたしも意地になつて、うんと我儘をしようと考へたのよ。」と父に語り、「あさ」を看病しながら「日本にはもう世界に誇るものがなんにも無くなったけれど、でも、あたしのお母さんは、あたしのお母さんだけは。」と「あさ」に心情を吐露している。「あさ」は「数枝」のこの信頼を、自身の煩悶を打ち明けることで自ら断ち切ったのだといえるだろう。倫理的煩悶の深みに沈みながら、「あさ」は「あたしをこのまま死なせておくれ。」と「数枝」に懇願するのである。「世界で一ばん仕合せな子にしたかつた」という、「あさ」の願いもまたこのとき潰えたのである。

「数枝」が「あさ」の告白によって失ったものは、敗戦後の日本に唯一残った世界に誇れる美しく優しい母にほかならない。この母は、「数枝」との絶対的な懸隔において越え難い〈正しさ〉〈良さ〉を持つ母であった。その越え難さが若い「数枝」にとって相当な負担、いわばコンプレックスであったことも事実である。だが、その越え難さの感覚こそが東京から「数枝」を呼び戻した最大の要因であったことも確かなのである。

「あさ」が「数枝」の継母であることが、「数枝」には越え難い絶対的な〈正しさ〉〈良さ〉を根底から崩壊させる伏線になっていることに注意したい。同じ男に言い寄られた二人の女。ただそれだけの関係に一気に転落してしまった「数枝」と「あさ」との間に、新たな倫理的共感が生じるには時間が必要だろう。実際、この場面以後、二人の間には一言の会話も交わされることはない。「数枝」を「この東北のはての生まれた家」に惹きつけ、留めることができたはずの「あさ」はすでに衰弱し、「あさ」を信じ「あさ」と暮らそうと願った「桃源境」のような世界の夢を「数枝」は自ら破棄して、その夢の無効を宣言する。

（数枝）　（略）えい、勝手になさいだ。あたし、東京の好きな男のところへ行くんだ。落ちるところまで、落ちて行くんだ。理想もへちまもあるもんか。

「数枝」が「理想」と考えた世界は、「気の合つた友だちばかりで田畑を耕して、桃や梨や林檎の木を植ゑて、ラジオも聞かず、新聞も読まず、手紙も来ないし、選挙も無いし、演説も無いし、みんなが自分の過去の罪を自覚して気が弱くて、それこそ、おのれを愛するが如く隣人を愛して、さうして疲れたら眠

つて、そんな部落」だという。倫理的な負い目を背負った人々が集まり、経済行為をすべて排除した自給自足の生活である。東京に住む「鈴木」という男性に宛てた手紙のなかで「数枝」は生家での生活についてこう書いている。

拝啓。為替三百円たしかにいただきました。こちらへ来てから、お金の使ひ道がちつとも無くて、あなたからこれまで送つていただいたお金は、まだそつくりございます。あなたのはうこそ、いくらでもお金が要るでございませうに、もうこれからは、お金をこちらへ送つて寄こしてはいけません。さうして、もしそちらでお金が急に要るやうな事があつたら、電報でお知らせ下さいまし。こちらでは、本当になんにも要らないのですから、いくらでもすぐにお送り申します。それまで、おあづかり致して置きませう。

生家での生活は「数枝」を貨幣経済から遠ざけ、経済的主体として生きた東京での経済行為を、遠く相対化して眺める位置に「数枝」を立たせることになっていることがわかる。島田が戦地から未帰還であること、鈴木が「わたしより年がずつと下のひと」であること、幼い「睦子」を連れて生きていくことの難しさなど、「数枝」の東京での苦労の本質が、経済的なものであったことは、この手紙の文面に溢れる幸福感に照らして明らかであろう。

「数枝」が思い描く「支那の桃源境みたいな」「そんな部落」を脅かすのは、したがってこの「部落」の住人が貨幣経済的な社会性を持ち込むことである。とりわけ「あさ」の存在は、この「部落」の精神的な象徴の位置にあって、「部落」の人々が寄り添って生きる喜びの源泉ですらあるであろう。「あさ」は、経済的主体の対極に位置する存在でなければならない。

ところが、「あさ」が六年前の「清蔵」の一件を「数枝」に告白する。「あたしは、だまされました」と。「清蔵」は「数枝」に自分の社会的優位をこのように説明していた。

（清蔵）　（何か勘違ひしたらしく、もぞりと一膝すすめて）さう、さうです。このままでは、だめです。思ひ切つて生活をかへる事です。睦子さんひとりくらゐは立派に私が引受けて見せます。私の家はご承知のやうにこのへんでたつた一軒の精米屋ですから、米のはうは、どんなにしたつてやりくりがつくのです。いまは精米屋が一ばんです。地主よりも誰よりも米の自由が

きくのです。

「あさ」が「清蔵」に「だまされ」たと知り、「出刃包丁を取り出し、逆手に持つて清蔵の胸を刺さんとする」行為にまで及ぶということが、いわば誠実さの貸借対照表の帳尻合わせではないと誰がいえよう。「あさ」が「清蔵」に求めたものが倫理的な〈正しさ〉であったことは確かであって、金銭の貸借対照表ではなかったとしても、利害得失の背信行為を責めるに十分な経済観念を「あさ」は持ち合わせていたのである。

しかしそのことを理由に「あさ」を「数枝」が責めることはできない。「数枝」が生家に身を寄せて、金銭の心配から解放されているのも、一家の家政を「あさ」が預かり、やりくりしているからだ。「数枝」は「清蔵」を罰するべきである。

だが「数枝」が夢見た自給自足のユートピアは、「あさ」の経済観念に基盤をもつ、誠実さの貸借対照表の収支バランスの感覚によって、確実に支柱を失うことになる。「数枝」が農業による自給自足にこだわるのは、貨幣による商品売買の正義の維持と、倫理による誠実さのバランスシートの維持とがいずれもきわめて困難であるからだ。しかもこの二つの〈正しさ〉は人間の行動規範のなかで密接に絡まりあい、分割不可能なものになっている。倫理と経済は、収支の帳尻合わせを求める領域として、「数枝」をこれまで苦しめてきた〈正しさ〉の根源に他ならないのだ。

「あさ」の衰弱する姿は、それ自体が「数枝」に対する倫理的な〈正しさ〉を改めて要求するものとして立ち現れている。それは「数枝」の夢想するユートピア崩落の象徴であり、また経済的規範によって常に裁断される〈疎開者〉の悲しみの深度を描き取る疎開者小説そのものの崩壊をすら意味している。

戯曲「冬の花火」は、「数枝」が「あさ」の看病を放棄し、帰京し困窮した生活に再び戻るしかないという「数枝」の決意と、東京からの電報の到来によって幕が下りる。このとき「数枝」を待ち受ける東京は、「カチカチ山」の狸を飲み込んだ淵と同じであったろうか。狸はしかし、死の間際、水面に体を沈めながら、なお兎への焦がれる思いを吐いていた。だが東京の雑踏に姿を消す「数枝」に、あの美しい兎はもはやいない。兎の美しい残忍性は、いかなる〈正しさ〉も要求しない。「あさ」は兎ではない。兎が求めていたものは、ただ美しくあることだけであったからである。

（やまさき　まさずみ・本学教授）